



わたしの聖戦

女性が働くことについて

176

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

女帝の哲学

「女帝」と聞いて、いったい誰を思い浮かべよう。

女帝を辞書で調べると「女性の君主（天皇・皇帝・王）」とある。

日本の天皇の中にも女性天皇は存在したが、日本の場合、先代の天皇が崩御された際、すぐに後継者がなくその皇女や皇太子妃が即位することがある。女性天皇ではあるものの、女帝と呼ぶには物足りない気がする。

外に目を向ければ、プロトマイオス朝のクレオパトラ7世や唐の皇帝高宗（こうそう）の皇后だった則天武后の名前が頭をよぎる。しかし、クレオパトラが本当に世界を動かす美女だったかとい

うと、今では否定の声も多く、女帝と呼ぶのも少々違和感がある。則天武后も女帝というよりは悪女と呼ぶほうがしっくりくる。

単なる女性トップにとどまらず、女帝と称される人物はどこが違うのだろうか。

日本でも、古代の女性天皇たちはなかなか周到だったようだが、33代の推古天皇以後はほとんど前述したとおりの経由で即位することが多かったためか、女帝という勇ましいイメージはない。そこには「欲」の匂いがないからだ。

そう、世界に名だたる女帝たちは、権力を握るためには何でもやっての

ける野心があった。政略結婚は当たり前、その相手が叔父であろうが早逝した夫の父親であろうが、関係なし。肉親殺しや夫殺しも厭わない。

ヨーロッパの貴族社会では、結婚は国やその権力者の思惑で成立するも



のであり、結婚してはじめて恋愛する、という考え方が一般的であったため、王に負けないくらい王妃もたくさんの恋人を作り、恋愛を楽しんだ。策略だらけの、裏切りと血みどろの世界からのし上がり、王冠を手に入れ

るまで、決してあきらめることがなかったのだ。そして、女帝となった女性たちは、思う存分権力を謳歌し世界を動かした結果、歴史に名を残した。例えば、処女王と呼ばれたエリザベス1世。彼女の異母姉妹のメアリーは、プロテスタントへの厳しい弾圧ゆえ、「ブラッド・メアリー（血みどろメアリー）」と呼ばれた。エリザベス1世の父親は残虐で無慈悲であったと評されるヘンリー8世。母親はアン・ブリーン、男子を産まない

き女帝は、ロシアのエカテリーナ2世である。北ドイツに生まれた小柄なエカテリーナ（当時の名はゾフィ）は、ロシアに嫁いだのち、徹底的に自らをロシア化する。名前もロシア風に変え、ロシア正教に改宗し、ロシア語に精通し、周囲の人々の信頼を得る。ついに自ら軍隊を指揮し、夫であるピョートル3世を幽閉、暗殺してしまう。しかも、何とエカテリーナはこのクーデター直前に愛人の子を出産しているのだ。女帝になつてみたいか、と言われたら答えはノーだ。でもそのパワーとバイタリテイには見習うべきところがある。せめてその爪の垢でも……。いやいや、やはりやめておこう。「身の程知らず」は恐ろしいと高らかに笑う、女帝たちの声が聞こえてきそうである。

イラスト・伊藤栄章